

岐阜市歴史探検隊「邪馬台国：北九州説を考える」遺跡探訪の旅

垣間見た弥生人の生活の一端

岩水龍峰

セントレアから福岡空港まで、僅か1時間足らず、大学に在職していた時代、福岡に試験場を設けるために市内の高校を訪問した思い出がよみがえる。確か、新幹線で5時間程度であったように記憶している。

さて、「邪馬台国：北九州説を考える」の旅であったが、「邪馬台国」にそれほど関心があるわけではないが、仕事柄、弥生時代の人々の「恐れおおいモノへの畏怖」「亡くなった方への畏敬」「村落共同体としての祀り」などを垣間見たいと思っていた。今回訪れた遺跡や資料館等の展示品から数例拾ってみた。

1. 吉野ヶ里遺跡の『巫女の神がかり』

吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の環濠集落の復元遺跡である。見事に復元されていて、この遺跡だけをみていると北九州説の「邪馬台国」は、ここにあったのかと錯覚するほどである。

その中心的と思われる北内郭の大型建物「祭祀殿？」は、卑弥呼が日々、祭祀や政務を司どったかのような雰囲気醸し出されている。



その中心的思想と思われる北内郭の大型建物「祭祀殿？」は、卑弥呼が日々、祭祀や政務を司どったかのような雰囲気醸し出されている。



大型建物の棟には、鳥のオブジェが乗せられている。魔除けや守護神だったのかもと言われている。



に巻き、手に小篋を持ち、琴の音に合わせて神がかりしようとしています。巫女の発するお告げを聞き分け、伝え

その建物の2階には、「最高司祭者の神がかりの様子」が展示されています。まさに「卑弥呼」ですね。「最高司令者（巫女）が、祖霊からお告げを授かるために、蔓（かずら）を頭



る人が控えています。鏡や玉・剣は、巫女が、祖霊と交信するための祭具です。」と説明されています。そして、1階では諸侯が会議をしている様子が展示されています。その中には、男性に交じって、女性の諸侯もいたようです。

2. 墓地の位置と棺

吉野ヶ里遺跡には、多くの棺やお墓が発掘されています。特に甕棺（かめかん）と言われる大型の素焼の土器で北部九州に特有の棺のことで、亡くなった人の手足を折り曲げて入れ、

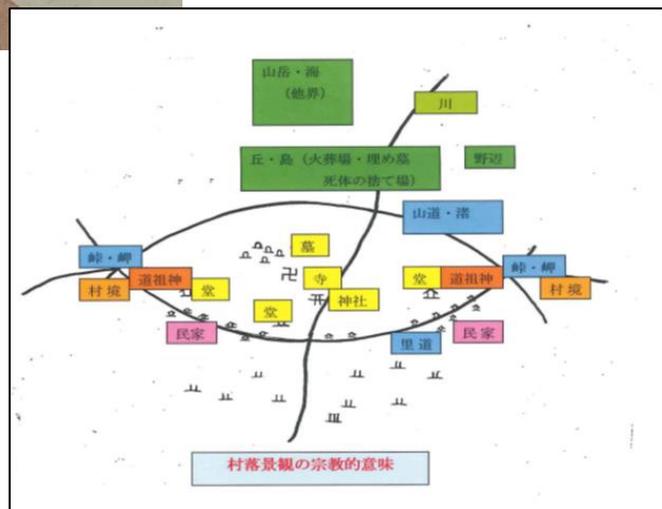


土の中に埋める埋葬方法で、弥生時代中頃、盛んに使われていたようです。墳丘墓の北側には、真ん中に道（お参りするための道）。その両側に多くの甕棺が整然と並べられています。亡くなった人に対する当時の人々の想

いを偲ぶことができます。

位置的には、まとまりのある生活空間の北の外れのような気がします。

現在の「村落景観の宗教的施設」の位置関係をもても、そんなに違いはないように思います。両墓制（埋め墓と詣り墓）の場合の、「埋め墓や死体の捨て場」の位置と似通っています。「詣り墓」は、人々の生活空間の中に



あります。



「北墳丘墓」の説明には、弥生時代中頃、吉野ヶ里を治めていた歴代の王の墓と考えられています。中からは14基の甕棺が見つかっており、一般の墓とは異なり、ガラス製の管玉や青銅の剣など、貴重な副葬品が納められていました。「北墳丘墓」に葬られている人々の身分の高さを示しています。パンフレ

ットによれば、この「北墳丘墓」の北側に、一般の方々を葬ったであろう「甕棺墓列」が示されています。



「祖霊の宿る柱」とは、北墳丘墓を守る祖先の霊が宿る柱と考えられています。北墳丘墓は、弥生時代の後半にはお墓でなく、祖先の霊を祀る祭壇として人々の信仰の中心となります。

この柱を「立柱」と呼んでいます。説明によれば、「立柱の穴跡は径 1.4~1.8m、深さ 1.1m でした。このことから、立柱の径は 50 cm、地上部は概ね 7mであったと推定されました。諏訪大社の御柱等の民俗事例を参考に、彫刻のないまっすぐな柱として復元されました。」とある。

この墓域に祠堂も建てられていたようです。墳丘墓に眠る祖先の霊に毎日お供え物を捧げ、お祈りをするための施設と考えられています。と説明されています。この当時からお墓の近くにお堂が建てられていたようです。時、至ってこうしたお堂は「法華三昧堂」といわれ、死者の冥福を祈っていたのが「三昧堂」、「三昧」と略され、お堂のない墓地も「サンマエ」と言われるようになったといわれます。この原型がすでにこの頃からあったようです。

3. 「魏志倭人伝」にみる葬送と現代

岩戸山歴史資料館の展示説明文のなかに「殯（もがり）について」の説明がありました。

貴人を本葬する前に、棺に遺体を納めて仮に祭ること。また、その場所。現代社会でも「喪に服す」という言葉があるように、昔から人々の死を思い、別れを惜しむ風習がありました。

中国「魏」の史書「魏志倭人伝」には、当時の日本（倭）の葬送儀礼について、次のように記述されています。

『始め死するや、停喪十余日、時に当たりて、肉を食わず。喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲食す。』

これによると、「死者は 10 日余の間は埋葬せずに、親族・縁者による飲食や歌舞を、死者の傍らで行っている」と記されています。近い親族は遺体の前で、「肉体の死」を泣き悲しむという情景も記述されています。また、その期間、肉食をしないことも記されています。理由は異なるかもしれませんが、現代の「精進料理」に繋がる興味深い内容です。

昨今の葬儀事情は、病院で看取り自宅に戻らず、そ

殯（もがり）について

貴人を本葬する前に、棺に遺体を納めて仮に祭ること。またその場所。

現代社会でも「喪に服す」という言葉があるように、昔から人々の死を思い、別れを惜しむ風習がありました。

中国「魏」の史書「魏志倭人伝」には、当時の日本（倭）の葬送儀礼について、次のように記述しています。

「始め死するや、停喪十余日、時に当たりて、肉を食わず。喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲食す。」

これによると、死者は 10 日余の間は埋葬をせずに、親族・縁者による飲食や歌舞を、死者の傍らで行っていると記されています。近い親族は遺体の前で、「肉体の死」を泣き悲しむという情景も記述されています。またその期間、肉食をしないことも、理由は異なるかもしれませんが、現代の風習、「精進料理」として見られます。興味深い事です。

のままホールに直接安置。通夜を済ませて全員帰宅（夜伽の習慣が喪失）。翌日家族のみで葬儀（共同体の崩壊）。町内の人たちに案内もしないで終わってしまう。都会では、葬儀もしないで「直葬」といって直接火葬場へ。以上、極端な事例ではありますが、死者に対する尊厳の欠如、喪に服すといった日本人の美しい習慣などが失われていく傾向にあります。

日本人の精神構造を考える上で、死者を送るといった葬送の儀礼には、豊かな精神的営みがあったことは事実です。そうした思いを私は「こころの宇宙」と表現し、死者を思うという行為は、こころ豊かな人間を育てることに繋がると信じ、葬送儀礼を含む通過儀礼を大切にしたいと思っています。

以上報告します。